



Title	Neuropsychiatric symptoms in patients with idiopathic normal pressure hydrocephalus
Author(s)	木藤, 友実子
Citation	大阪大学, 2010, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/54070
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed 大阪大学の博士論文について https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed をご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

【90】

氏 名	木 藤 友 実 子
博士の専攻分野の名称	博 士 (医 学)
学 位 記 番 号	第 2 3 6 5 9 号
学 位 授 与 年 月 日	平 成 22 年 3 月 23 日
学 位 授 与 の 要 件	学 位 規 則 第 4 条 第 1 項 該 当 医学系研究科内科系臨床医学専攻
学 位 論 文 名	Neuropsychiatric symptoms in patients with idiopathic normal pressure hydrocephalus (特発性正常圧水頭症患者における精神行動障害)
論 文 審 査 委 員	(主査) 教 授 武 田 雅 俊 (副査) 教 授 吉 峰 俊 樹 教 授 佐 古 田 三 郎

論 文 内 容 の 要 旨

[目 的]

正常圧水頭症(NPH)は歩行障害、認知機能障害、排尿障害を三徴とする進行性の疾患であり、くも膜下出血や髄膜炎のような先行する疾患を伴う二次性正常圧水頭症と原因不明の特発性正常圧水頭症(iNPH)に分けられる。iNPHは潜行性に発症すること、症状が高齢者にとって非特異的であることなどから二次性NPHと比較して見過ごされやすい。しかし近年治療可能な認知症として注目を集めている。

認知症疾患は、一般に認知機能障害、神経学的異常とともに精神行動障害を伴うことが多く、精神行動障害は患者および介護者のQOLに大きな障害となる。従って、その特徴やメカニズムを知ることは非常に重要な課題である。

これまでiNPH患者における精神行動障害としては、無為が特徴的であると信じられてきたが、根拠となる研究報告はなされていない。そこで、今回我々は、iNPH患者の精神行動障害を多数例で検討し、その特徴を明らかにすることとした。また、三徴と精神行動障害との関連についても検討した。

〔 方 法 〕

脳外科、精神科、認知症専門の3種類の診療施設から、iNPH患者をリクルートした。iNPH患者のincluding criteriaは、1)60歳以上、2)三徴のうちの一つ以上を持つ、3)頭部MRIにて脳室の拡大と高位円蓋部のクモ膜下腔の狭小化を認める、4)他の疾患で説明できない、5)脳室拡大を来たす先行疾患がない、6)髄液圧が正常、7)タッグテストで症状の改善と認める、とした。患者は男性38名、女性26名、平均年齢は74.9±5.9歳、MMSEは20.6±5.8点であった。対照群は男性41名、女性85名のアルツハイマー病（AD）患者で、年齢、MMSEに有意差はなかった。信頼できる介護者に対して老年精神医学あるいは老年神経科学を専門とする医師がNeuropsychiatric Inventory（NPI）を用いて精神行動障害の評価を行った。NPIは妄想、幻覚、うつ、不安、興奮、脱抑制、多幸、易刺激性、無為、異常行動の10項目の精神行動障害を重症度（0-4）と頻度（0-3）で得点化するもので、この得点を用いてiNPH群とAD群の比較を統計学的に行った。さらに、三徴の重症度をiNPH grading scale（iNPHGS）を用いて評価し、精神行動障害の相関を調べた。

〔 成 績 〕

iNPH患者で何らかの精神症状を持つ患者の割合は73.4%であった。最も頻繁に見られた症状は無為で70.3%に認められ、次いで不安が25%、興奮が17.2%と続いた。AD患者で何らかの精神症状を持つ患者の割合は91.3%であり、iNPH群と比較して有意に多かった。iNPH群では、AD群と比較して、症状を持つ患者の割合が高い症状はなかったが、妄想、興奮、うつ、易刺激性は症状を持つ患者の割合が有意にiNPH群のほうがAD群よりも低かった。また、NPI total scoreの平均はiNPHで7.5±11.4、ADで12.3±11.1で、iNPHの方が有意に低いスコアであった。下位項目においては、iNPHの方がスコアの高い症状はなく、妄想、興奮、うつ、易刺激性でADよりも有意にスコアが低かった。

iNPHGSそれぞれのスコアとNPIの下位項目のスコアの相関を脳外科施設と精神科施設の患者40名で検討した。iNPHGSの認知機能のスコアと異常行動、無為、iNPHGSの排尿障害と異常行動で有意な正の相関を認めた。歩行障害とNPIスコアには有意な相関は認めなかった。

〔 総 括 〕

iNPH患者において精神行動障害はADと比較して軽症であることが分かった。これまでiNPHの極めて特徴的な症状であるかのように考えられてきた無為は、70%と高頻度で認められたものの、AD患者のそれと同程度であることが分かった。次いで、不安、興奮の頻度が高かった。精神行動障害と認知機能障害の相関と、過去の精神症状と脳画像研究の結果から、iNPHの精神行動障害には前頭葉の障害が深く関わっているのではないかと考察した。

論文審査の結果の要旨

本論文は、特発性正常圧水頭症（iNPH）患者における精神行動障害の特徴を明らかにした。iNPH患者における精神行動障害はアルツハイマー病（AD）患者と比較して頻度も少なく軽症であることが分かった。これまで極めて特徴的な症状であるかのように考えられてきた無為は、70%と高頻度で認められ、AD患者のそれと同程度であることが分かった。次いで、不安、興奮の頻度が高かった。精神行動障害と認知機能障害・排尿障害が有意な相関を示したことは、過去の精神症状と脳画像研究の結果から、iNPHの精神行動障害と前頭葉の障害との関連を示唆するものであった。今回の臨床研究により、iNPHの臨床的特徴がより明らかとなり、今後の病態解明に役立つものと考えられた。また、認知症患者のマネージメントという観点からも本研究の結果は有用なものであり、学位論文に値すると考える。